

津本陽

敗れざる教師



敗れざる教師

津本陽



講談社

敗れざる教師

昭和五十七年二月二十四日 第一刷発行

昭和五十七年四月 六日 第二刷発行

著者 津本 陽

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二

電話東京(〇三)九四五―一一二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定価 一〇〇〇円



落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© Yo Tsumoto 1982, Printed in Japan

ISBN4-06-119376-7

(文1)

敗れざる教師

装画
装幀

大竹明輝
辻村益朗

梅雨の晴れ間の陽がいらだたく照っていた。南城市立第五中学校の三階屋上で、四人の男子生徒が貯水タンクのかげに日射しを避け、あぐらをかいていた。

いずれも柄物の半袖シャツに、ボンタンという、太股のあたりがだぶついた仕立てのズボンはを穿はいていた。頭髮はいいあわせたようにアフロにパーマをかけ、まだら猫の体毛のように、いくつかの部分を褐色に染めていた。額には深く剃そりをいれ、青白い皮膚があらわれている。耳朶みみたぶにプラスチックのピアスを通し、眉毛を剃り落していた。

彼らは三年生であった。田島輝夫は、同級生の長井清と加納貢が、駅前のスーパーでかっぱらってきた缶ビールの二本めをあげ、一気に喉へ流しこんだ。

汗が額に吹き出し、こめかみを流れおちる。

「暑いのも、風吹かんさかい、こんな所に居られんぞ」

輝夫は、顎あごをぬらす滴しずくをぬぐいながら、長井たちを流しめに見た。

「ぼちぼち、向いの喫茶店で体冷やして、出かけるか」

「いや、待て。ここで待っとるほうがええ。喫茶店へ入ったら、先公が警察マッポに眼つけられて危ヤバい

ぞ。もうちょっと待ちや」

上野英樹が、瘦せた体をものうげにコンクリートの壁にもたせたまま、輝夫をとめた。

輝夫は生徒数千五百人の大規模校である第五中学校の番長である。彼は先日南城市内の第七中学校の番長から、舎弟になれといわれた。第七中学校の番長風間は、暴走族疾風連合^{はやて}とつながりを持ち、近頃急速にその勢力を伸ばしてきていた。

風間は身長百八十センチ、体重九十キロの^{どうも}獰猛な体軀を備え、喧嘩となれば狂ったように暴れまわる。その氣勢に番長が屈したため、第七中学の舎弟校となった中学校は、すでに四校に達していた。風間はそのうえに君臨する総番長である。

田島輝夫は長井ら三人をつれ、南城市駅前のパチンコ屋の店先を歩いているとき、風間に呼びとめられたのである。

風間は、自分のつっぱりどもを、十人も引き連れていた。

「よう田島、元気か」

風間は眉を剃った長い顔をゆがめて笑った。

「おかげさんでなあ、達者だっせ。近頃困ったこというたら、トルコで毛じらみうつったぐらいや」

輝夫が答えると、風間は鼻で笑った。

「ところでなあ、あんたにちょっと話あるんや。その店まで顔貸してんか」

輝夫は鋭い眼で風間を見て、上衣の内ポケットに手を入れた。そこには鉛のメリケンサックが入っている。

風間は輝夫の身ごなしを見て、いちはやくとめた。

「おい、決闘張るつもりやないで。話だけや、あわてんように頼んまっせ」

輝夫は引き締った筋肉質の体にみなぎらせた構えを一瞬にゆるめた。

風間の相談というのは、輝夫たちが総番長としての彼の傘下に加わるのを望むという、勧誘であつた。

「ほんなら、あんさんのいわはるようにしたら、おたくの学校が番長校で、うちが舎弟校になるわけだな」

輝夫はたずねた。そうや、と風間はうなずいた。

「俺が総番長になるんやから、そうなるねん。そのかわり、あんたらも、俺らのグループへ入ったら、いままでよりずっと顔きくようになるぜ。遊ぶ場所も多うなるし、女も回したるがな。大勢で組んだほうが、ごっつい遊びができるさかいなあ」

風間の言葉を聞くうち、輝夫の頭が燃えた。

「ことわるわ。あんさんの舎弟にはなりとうおまへんわ」

輝夫は、強い語調で答えた。

「なんやて、俺らの仲間になれんいうのんか。何が不足やねん。いまはなあ、暴走族かて、一人でも仲間ふやしたグループが勢力つようなるんや。皆で、おもしろやろうやないか。それに舎弟になつてもらえなんたら、あんさんらと敵同士になるで。それでもかまへんのか」

「かまへんで、俺らは勝手にやりたいんや」

風間の仲間が口をはさんだ。

「うちの申し入れを断わらったら、あんさんら、この辺りを大きな顔して歩けんようにならはりまっせ」

「よろしおまつせ」

十五歳の少年たちは、一人前のやくざめいた応酬の後、おだやかに別れた。

輝夫たちは、その後アジトのアパートに集まって相談した。風間たちは、輝夫に申し出をことわられたうえは、かならず襲撃してくるに決っていた。第五中学の暴力グループを力で制圧して、第七中学の舎弟校にするのである。

「やられるまえに、こっちからやったろうやないか。木刀持って殴りこみかけたろや。うちの人数は、三年の不良揃えたら二十人は寄るぜ」

上野英樹がいった。

「ヒエーッ、格好ええぞ。殴り込みかけるんか。俺は養成や。明日やろうや。木刀より、鉄の棒のほうがええで。殴ったら、ようこたえるわ」

「まあ待て」

輝夫が口ぐちにいいつの皆をおさえた。

「俺はなあ、殴り込みかけるのに賛成せんで。七中の奴らは、風間だけが頼りや。そやから、俺があいつと一対一の勝負したる。あいつさえ痛めてやったら、二度と舎弟になれいうては来んやんか」

「そやけど輝やん、一人やったら危いぜ。大勢に袋叩きにされるがな」

上野が反論した。

「俺たちは輝やんが頼りやし、一人で行くのは反対やで。やっぱり皆で殴りこもうや」

田島輝夫の内部に、危険に身をさらすときの、眼のくらむような爽快感がよみがえった。母と姉と三人で暮らしている、南城市の裏町、饅^すえたにおいのただよう路地の奥にある文化アパートの生

活を、一時でもかなぐりすてることができるのは、衆人環視のなかで、英雄のようにふるまうときだ。そのとき、彼は憂鬱な日常の壁をやぶり、異次元のような、光彩まばゆい世界へ飛翔できるのだ。

「いや、やっぱり俺は風間と一対一^{タイマン}張るぞ。お前らは気になるんなら、ついて来て見てくれや。俺がやられたら、お前らで勝負つけてくれたらええやん」

「ヒエーッ、かっこいいぞ」

長井がふたたび奇声を発した。

「あいっら、疾風連合とつきあいあるやろ。そやから、町で喧嘩したら、助っ人寄ってくるぜ。やっぱり、あいっらが学校へ出てきたときがええぞ。下校時を狙うて道で待伏せしたろうや」

輝夫の言葉で、作戦が決った。彼らはその翌日から、第七中学校の校門前に、同級生の一人を見張りに置いた。

風間は三日間、登校してこなかった。輝夫たちは中学校の三階屋上や、雨天体操場で、見張りが駆け戻ってくるのを待っていた。

「今日は四日めやなあ。そろそろ風間が出てくると違うやろか」

上野が眼を細め、雲の切れ間を見あげた。彼の脇には、三十センチほどに切られた鉄パイプが置かれていた。

階段に足音がきこえ、輝夫たちは立ちあがった。見張りに出かけていた、三年生の玉置猛が戻ってきたのだ。

「来た来た」

玉置が叫んだ。

「風間が来たぞ。子分を十人ほど連れて来よった」

「ふうん、給食を食いに来よったんやな。ほな、一時か二時には帰りやがるやろ。すぐ行こ」

輝夫たちは、教科書を一冊も入れず、ひらたく押しつぶした鞆かばんを提げて階段を下りた。

校庭へ出るところで、数学の教師に出会った。輝夫は教師を正面からへいげいした。相手は射すくめられたように視線を落し、すれちがった。

第七中学校まで一キロほどの道を、彼らは外股で胸を張って練り歩いた。輝夫はしだいに身边に迫ってくる危険のこげくさいようなにおいを、陽射しのうちに嗅ぎわけた。

思いきって、どんと行つたれ、と輝夫は自分をけしかけていた。他校の番長グループと決闘するときは、命がけであつた。もし争いに負ければ、徹底的にいためつけられる。脳振盪脳とうを起し、倒れて泡を吹いている者の顔にも、情容赦なくブロック煉瓦れんがが投げつけられる。

校内で暴力をふるい、教師を痛めつけるときとはわけが違ふ。輝夫は、危険に身をさらし、仲間
に讃嘆の声を浴びせられるのが好きなのだ。

彼は煙草やシンナーを吸うが、それは仲間との連帯感をつよめるための行事にすぎなかった。ひとりであるとき、彼はそれを口にしたことはない。百七十五センチの彼の体には溢あふれるような力が満ちていた。

輝夫は十歳のとき、福岡県飯塚から大阪へ出てきた。彼の父親は炭坑夫であつたが、勤め先が閉山した後は、土建会社の雑役夫になつた。輝夫が六歳のとき、父親はバクチに負け、多額の借金をこしらえて自殺した。

負けずぎらいであった父は、彼らしい死にかたをした。白昼、ダイナマイトの雷管を口にくわえ、導火線に点火して町の大通りを疾走し、文字通りの自爆を遂げたのであった。

父の死後、母、姉と輝夫の生活は惨めな貧窮の底におちた。親戚にまで嘲けられ、逃れるように大阪に出ると、母は鶴橋の雜貨問屋の店員、姉は天王寺の喫茶店に勤めた。輝夫は小学生の頃から、鍵っ子であった。遠足にゆく金もない生活が続いた。

小学校で、学力の遅れた輝夫は、教師の厄介者になった。宿題を忘れたといつては洗濯バサミで両耳と鼻を血のどるほど挟まれ、額じゅうをマジックインキで塗りつぶされる体罰をうけた。

中学校へ進学すると、彼が要注意生徒であるという報告が、小学校から送られていた。中学校でも、彼は厳しい体罰を集中された。教師の平手うちで、口が切れるような目にも会うが、黙ってたえしのんだ。便所掃除がゆきとどかなかったといつて、濡れた便所の床に一時間も正座させられたこともあった。

三年生になると同時に、彼は全校の番長になった。彼は校内の秩序を急速に乱すことに力を尽しはじめた。校内のトイレを破壊し、非常ベルを破壊し、窓ガラス二百三十枚を叩き割る事件を、すでにひき起していた。

いまでは生徒指導主事さえ、校内で輝夫に会うと眼をそらし、腫れものにさわるようにあつかっていた。輝夫の心は乾ききっていた。彼は暴力をふるい、荒れ狂っているときだけ、昂揚した至福を味わうのであった。

輝夫たちは、第七中学校の校門脇の日影で、一時間ほど待った。昼食時間が過ぎ、校庭に生徒た

ちの姿が行き来し、やがて授業開始のサイレンが鳴って、人影が消える。

輝夫はポケットからメリケンサックをとりだし、拳にはめた。十分ほど経って、暑さにもかかわらず、膝まで届くガラン上衣にボンタンズボンのいでたちの風間が、大勢の取り巻きを引きつれ、外股の躍るような格好で、校庭の砂を蹴立てて正門に向ってきた。

「お前ら、退つとれ」

輝夫は四人の仲間にいいすて、歩み出た。歩みを進める動作を続けるためには、並みはずれた度胸が必要であつた。危険な気配が、鼻先で閃光を放っていた。輝夫は全身に流れるほど汗をかいていた。

風間は岩の揺らぐような遅ましい歩行をとめた。

「汝（おれ）な、何しに來（き）さした」

風間は腹からしぼり出すような太い声で聞いた。取り巻きの生徒たちが、チェーンやメリケンサックを取り出した。

輝夫は全身の血が逆流するような闘志に、身をふるわせた。怯えは瞬時に消えた。

「おい風間、こないだは挨拶ご苦労やったなあ。今日はこっちから挨拶に來たで、汝（おれ）と一對一の勝負つきたるわい。さあ来いっ」

輝夫は叫びたてながら、大股に歩み寄った。

「しゃらくさいこと吐（ぬ）かすな。おんどれ死ぬ氣で來たか。いますぐおとしまえたつたで」

風間はガラン服を脱ぎ、取り巻きの一人に渡すと、両拳にメリケンをはめ、迫ってきた。

輝夫は牛のような巨体の動きに眼をつけていた。彼はスリッポンの短靴をはいた右足をわずかに後へ引き、待っていた。風間が右手をのばし、輝夫の胸ぐらをつかもうとしたとき、輝夫はいき

なり右足を蹴あげた。

分厚く重い感触が、足首にこたえた。風間はのけぞったが、辛うじて踏みこたえた。輝夫は立ち直る隙を与えず、ふたたび右足で股間をしたたか蹴りあげ、メリケンサックをはめた左手で、こめかみを力まかせに打った。

地に据えた巨岩を蹴り、殴るようなしたたかな反動が輝夫をよろめかせたが、風間はゆっくりと膝から崩れ、地面に膝をついた。

彼は口を傷つけたらしく、血泡を吹いていた。眼つきがうつろになり、顔の血の気が引いていた。

「おんどれ」

風間の取り巻きたちが、輝夫に襲いかかってきた。

「このガキや、殺されんど」

「腕折ったれ、手え折ったれ」

輝夫の仲間たちが、鉄棒をかまえて迎えうった。

勝負は僅かな間に終わった。輝夫たちは、不意うち成功し、風間とその取り巻きのつっぱりどもは、校庭の砂を噛んで半死半生の目にあわされた。

輝夫たちは、警察に捕えられることもなくその場を逃げ去った。

夜になって、彼らはアジトのアパートで祝宴をひらくことにした。女番長のルリ子とその四人の仲間も、宴会に参加した。スーパで買ってきたハムやウィスキーを、彼らは飲み食いした。

煙草の煙が霞のようにたなびいた部屋で、皆は淫らな数え歌を高唱し、笑いくずれた。いつ警官が踏みこんでくるかもしれないという懸念は、酔いがきれいに拭い去ってくれた。

「輝やんは、やっぱり凄いなあ。ほんまにかっこええよなあ。俺、感心したで」

「ヒャーッ、ほんまや。俺も感動しましたよ。輝やん、明日から南城市の総番長やがな」

長井や玉置が、女生徒と抱きあいながら、氣勢をあげる。

輝夫は、片手にグラスを持ち、別の手でルリ子の体を探っていた。ルリ子はいくも呼吸をはずませ、視線を宙に浮かせていた。

「おい上野、疾風連合のやつらやけどなあ、風間をやっつけたあとは、仕返しに来るかな」

玉置が、女生徒を抱いて寝ころんでいる上野に聞いた。上野は起きあがり、さめた口調で答えた。

「そんなこと、俺知るかいや。来やがったらゴロ巻いたるだけや。暴走族みたいなもの、何じやい」

輝夫は上野の言葉を聞くと、唇をゆがめて笑った。彼は上野がきらいではない。

上野は一年生のときは、学年でも指折りの秀才であったが、二年になって、成績は急速に下降した。彼の母親が、愛人と失踪し、父親と二人が残されたのだ。彼の父は、電機工場の工員であった。上野は父親と二人暮らしの家へ帰ると、炊事や洗濯の手伝いをする、優しい性格であったが、不自由な暮らしに耐えるうちにいつのまにか餓狼がらうのような荒々しさを身につけていた。いまでは父親はアル中だという。

上野英樹は一年生の頃には学級委員をつとめ、クラスの生徒たちの信望をあつめていた。二年になって母に去られたあと、彼は週のうち二日は欠席するようになった。服装も乱れ、うすよごれて、かつての秀才の姿がうかがえない彼を、他の生徒たちはさげすみはじめた。

英樹はそれまでの反動のように、皆に侮蔑がべつされはじめた。彼は、かつて学級委員としての彼の指

揮に、唯々として従った同級生たちに、こづかれ、教科書をやぶられ、椅子にゴム糊を塗られる、さまざまのいたずらを浴びせられることになった。

ある日、体育の時間がはじまるまえ、英樹は運動着に着がえていた。意地のわるい生徒が、靴をこうと前かがみになった彼の背に、蓋をとった墨汁の瓶をかたむけた。

背に伝わるつめたさで、おどろいて顔をあげると、相手は眼前で歯をみせ笑っていた。彼の腕力は英樹より数段上であった。二人を取り巻いて、同級生が壁をつくり、笑っていた。

英樹は運動着を脱いだ。ブルーの生地、墨汁が大きく地図のように染み、下着にまで透っていた。

その運動着に、英樹は思いでがあった。入学式のあと、母とともにそれを買った記憶が、曇り空の遠方に光る晴天のように、胸を締めつける悲哀をともなうてよみがえってくるのである。

英樹は呻いた。

「やったな」

相手はまた笑った。

「おう、やったよ。先公にいつけるか。それとも俺と一対一張るか」

英樹は汚れた運動着をにぎりしめたまま、歯をくいしばった。同級生たちは、笑い崩れた。

英樹はこのままでは済まされなと思った。このまま泣き寝いりをすれば、翌日から彼はクラスじゅうの生徒からあざけられ、いためつけられる弱者になりさがる。いじめられっ子とレッテルをはられた者の無残な学校での日々を、英樹は小学校の頃から飽きるほど目にしていた。

彼の胸には、母との思いでを踏みにじられた憤懣が、焰と燃えさかっていた。彼はそのまま級友たちを押しわけ、職員室へ走った。

担任教師は、スポーツシャツを皺しばませ、肥満した腹をつきだして椅子にそりかえり、女性の教諭こわだかと声高に談笑していた。

担任は、汚れた下着のまま駆けつけてきた上野英樹に、冷たい眼をむけた。

「先生、ぼ、僕は背中に墨汁をかけられたんです」

「なんやて、見せてみい」

担任は運動着をうけとり、ひろげてみた。

「うわあ、こらあかなあ。どれくらい染みやないか。水道ですぐ洗うてこいや」

女の教諭が向いのデスクから首を伸ばした。

「そらあかんよ。そんだけ染みこんでたら、もう洗うても取れへんよ」

担任がたずねた。

「誰がやったんや」

英樹は、名前を告げた。「あいつか」と担任はしばらく考えていたが、やがて英樹に運動着を返しながらたずねた。

「やられたときのことを、もっとくわしくいうてみい」

「運動着に着換えてるとき、しゃがんだら、いきなり背中へ冷たいものかけられて、ふりむいたら、あいつが片手に墨汁の瓶持って立ってたんです」

教師は眼にためらいの色を浮かべ、彼に告げた。

「それやったら、あいつがわざとやったんではないのやろ。まえの授業は書道やったんやろ。ほんならあいつも後片付けを急いで、手もとが狂うたんやないか。あいつはちょっとそそっかしいところがあるさかいなあ。お前も気いつけんといかんぞ。この頃、お前の生活は全体にたるんどる。そ